学校教育目標：夢に向かって　やさしく　かしこく　たくましく
旭川愛～感謝と決意の150周年～
校報 旭川
令和７年３月２１日
第２２号

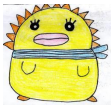
令和６年度を締めくくる～修了式～

本日、令和６年度修了式を行い、今年度を締めくくりました。一年を締めくくる大切な儀式として位置付け、全校児童が体育館に椅子を持って入場しました。（１年生の椅子は５年生がお手伝いしてくれました。）修了認定では、担任の呼びかけに合わせて、学級ごとに起立し、校長が現学年の修了と次学年への進級を認定しました。どの学年も立派な態度で参加し、この一年の成長を感じるとともに、来年度への期待感の膨らむ修了式になりました。

教室に戻り、「修了証」と通知表「あゆみ」を渡しました。ご覧いただきながら、この一年のお子さんの頑張りを認め、励ましていただければと思います。

保護者の皆様のご理解とご協力に感謝致します。一年間、ありがとうございました。

代表児童の発表



１年１組　〇〇〇〇

わたしは、たしざんがとくいになりました。ともだちがいっしょうけんめいがんばっているのをみて、わたしもちょうせんしました。２年生になっても、じぶんの力でがんばろうとおもいます。

１年２組　〇〇〇〇

ぼくがいちばんがんばったことは、ミルハスのはっぴょうかいです。せりふとダンスをがんばりました。キレッキレにおどれて、うれしかったです。２年生では、大きなかずのべんきょうで千と万のかずのしくみをしりたいです。

１年３組　〇〇〇〇

わたしは、入学してからの一年間で、たくさんの本をよんできました。本をよんでおもしろいなとかんじたり、たくさんのことをしったりすることができました。２年生になってからも、たくさんの本をよみたいです。

５年生の反省と６年生の目標

５年　〇〇〇〇

私は５年生で新しいことをたくさん学びました。

その一つが、委員会活動です。今年、５年生になり、６年生と一緒に引っ張っていくリーダーとなりました。委員会を決めるとき、私は「環境ボランティア委員会」になりました。週に１回、毎週忘れずに金魚やメダカにえさやりをしました。学校の代表として生き物のお世話をすることに、責任と誇りを持ち、まじめに取り組めたと思います。そして、６年生ありがとう集会では、５年生が学校のリーダーとなる「はじめの一歩」でした。自分たちで企画して、実行したその会は「来年わたしたちに跳ね返ってくる大事な会だ」と思い、一生けん命に取り組みました。エール隊にも入りました。６年生に感謝の気持ちが伝わっていたらうれしいです。

６年生になって気を付けていきたいことは、あいさつです。６年生は最高学年として学校のリーダーとなります。下級生のお手本となれるように、しっかり、はっきりとしたあいさつができるようにしたいです。また、学習にも力を入れていきたいです。６年生は、量ではなく内容の勝負だと思います。むずかしくなるし、中学へ上がるために大切な年だとも考えているので、気を引き締めてがんばりたいです。

私はもうすぐ、期待と緊張でいっぱいの一年をむかえます。今までの５年間の間、ずっと見てきたたくさんの６年生の姿を思い出し、一生けん命、責任を持って、小学校最後の残り一年をすごしていきたいです。

６年生、巣立つ～卒業式～

３月１４日（金）に「令和６年度卒業証書授与式」を行いました。ご来賓や保護者の皆様に見守られながら、６年生は仲間と共に堂々と学び舎を巣立ちました。６年間で身に付けた力に自信を持って、今後もふるさと秋田や旭川を支える人材として成長していってくれることを願っています。

感謝と誓いの言葉	証書授与	呼びかけと歌

※ＪＡ秋田なまはげカップ第15回秋田市６人制バレーボール総合選手権大会
・敢闘賞　旭川バレーボールスポーツ少年団

※第19回五誓剣伸会記念大会
・高学年団体戦の部　準優勝　雄信館Ａ　○○○○　○○○○　○○○○

栄光の記録

※第10回六三四の剣杯少年少女剣道大会
・男子高学年の部　　準優勝　雄信館Ａ　○○○○　○○○○

※書きぞめ
・金賞　○○○○
・銀賞　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○
・銅賞　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○
　　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○
・入選　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○　○○○○
　　○○○○　○○○○　○○○○

指導者としての在り方

一年間を振り返り、思い出されることの一つに、指導者としての在り方について考える場面がたくさんあったことが挙げられます。本校の教師にも、指導者として、どのように児童を導くか、日々苦悩する姿や解決に向けて協議・奔走する姿がありました。課題を前に、全身全霊を傾け、身を粉にして叱咤激励し続ける日々が繰り返されました。おそらく、保護者の皆様も、「親」という子どもを指導する立場として、教師と同じような姿があったものと推察します。大人として、教師として、親として、場面や状況に応じながら、子どもとどう向き合うかは、永遠の課題の一つです。

指導者としての在り方を考えるときに、思い出す言葉があります。それは、「啐啄同機」（そったくどうき）という禅の言葉です。卵の中の雛鳥が殻を破ってまさに生まれ出ようとする時、内から殻をつついて音を立てることを「啐」といい、ちょうどその時、親鳥が外から殻をつつくことを「啄」といいます。「啐」と「啄」が同時であってはじめて、殻が破れて雛鳥が産まれることから「機を得て両者相応じる得難い好機」のことを意味するそうです。教育は子どもの心身の成長に応じて適宜適切に行われなければならないものです。また、大人の一方的な指導ではなく、子どもの自発性を引き出した上での指導でなければなりません。教えを受ける側と教えを与え導く側とが一致してこそ為し得ることだと「啐啄同機」は教えてくれています。

これからも私たちは大人として（教師として、親として）本気で子どもたちと向き合い、「啐」と「啄」が同時となれるよう、子どもの心を見つめ自発性を引き出し、学ぶ姿勢をもち続けながら、指導者としての情熱を燃やし続けていきたいものです。子どもが独り立ちし、社会でたくましく生きていけるように、、、。